すべて知り合っていると思っても案外お互いのことを知らない。親子とはそんなものだ。母と娘の近しい関係のなかにおけるふとした疑問。だれにも思い当たることがあるだろう。

花のボリューム匂ひのボリューム公園に大人と呼びたき木犀ありぬ　八汐阿津子

「大人と呼びたき」に意表をつかれた。圧倒的な大きさの木犀があふれるように花を咲かせているのだろう。字余りの第一・二句が、花の重量感と対応しているようで、楽しい。

恋人はふいに訪い来て掃除機をかけてわたしの古き靴捨つ　屋良健一郎

来てから帰るまでどれぐらいいたのか作品からは分からないが、何時間かの物語がざっくりとうたわれているのだろう。シンプルな分、かえって読者は「恋人」を強く印象づけられる。

指揮棒は振り上げられて客席の上に生まれるいちまいの湖　水口奈津子

何百人かが指揮棒をみつめて息を飲んだ瞬間である。群衆をうたうのは難しいのだが、ここは、群衆が醸し出す空気を的確にとらえて成功。細部をいえば、「上に」が上手い。客席そのものではなく、客席の上に湖が生まれたとした点が、勝負どころだった。

憶えてはわすれていったこの年の手帳も残り少なくなりぬ　植山俊宏

手帳に書き込んだスケジュールが話題である。日々の予定を書き込み、覚え、行動し、やがて忘れる。その繰り返し、その積み重ねが、人生なのだ。そんな道筋で、読者に人生を考えさせる力が一首にはある。

羊の群ゆっくり道を横切りて牧場の上の雲に入りゆく　小野フェラー雅美

広い牧場にやや傾斜があって、向こうが少しずつ高くなっているのである。そこがイメージできると、「牧場の上の雲に入りゆく」がすっと理解できる。起伏のあるドイツの牧場風景である。作者にこんな景色の場所に連れて行ってもらったのを思い出す。羊の群を見送っている数分間の時間が見えて来る作。

線路にはペンペン草も濡れていて都電荒川線ののどけさ　森屋めぐみ

早稲田から三ノ輪橋までを一時間弱で走る都電荒川線は、街中を走る部分もあるが、緑化された専用軌道を走る部分もある。このような昭和前期をおもわせるのどかな風景に接することもできて、人気がある路線。「濡れていて」が、いい。細部をうまく詠み込んだ力量。

接客の○を教へてゐる講師シャボンの泡のごとく微笑む　高山邦男

会社が招いたマナー指導の講師が、マニュアル通りといった感じで教え、マニュアル通りといった笑顔を見せたのである。上から目線の講師の話に辟易している部屋の空気が読める。